

忘れてしまいそうな ビッドル来航の話

奥 正敬

1853（嘉永六）年、アメリカ合衆国のペリー提督が黒船四隻で浦賀へ来航して、翌年日米和親条約を締結します。しかし、アメリカはこれより七年前の1846（弘化三）年に通商条約を結ぼうとしてジェームズ・ビッドル（James Biddle, 1783-1848）提督⁽¹⁾ が率いた二隻から成る艦隊を派遣していました。ここでは、本学図書館に残るこの時の絵（本誌の表紙と27頁参照）と共に、ペリー来航の陰に隠れて忘れ去られてしまったかのように思われるビッドル来航のエピソードを振り返ってみたいと思います。

■アメリカ、国土を拡張し東アジアへ市場を拓ける

アメリカは1776（安永五）年の独立後、イギリス資本から離れたことにより経済的な不況に陥ります。しかし、1780年代半ばから清国（中国）などの新たな市場を開拓して回復に向かいます。1793（寛政五）年のフランス革命後に始まった英仏戦争では、アメリカは中立国として収益を伸ばしましたが、イギリスの封鎖海域と国益が衝突し、1812（文化九）年には米英戦争へと発展しました。この戦いは英仏戦争のナポレオンの敗北によって、その意義を無くし1815（文化十二）年に終息しました。

アメリカは英仏戦争の最中の1803（享和三）年にフランスからルイジアナを、また、米英戦争後の1819（文政二）年にはスペインからフロリダを購入し、さらに1845（弘化二）年にはメキシコから独立していたテキサスを併合しました。そして、ビッドルが来日する1846（弘化三）年には、結果的にカリフォルニアなど広大な土地を領土に組み入れることになるメキシコとの米墨戦争へ突入しようとしていました。

この頃、清国ではイギリスとの間でアヘン戦争が起り、1842（天保十三）年にイギリスの圧倒的な優勢の内に結ばれた南京条約を以て終結していました。アメリカもこの不平等条約に倣って1844（弘化元）年に清国と望廈条約^{ぼうか}を結び、同国での市場を拡大させていました。

また、アメリカでは太平洋上での船舶捕鯨の

高まりから日本寄港の実現を求める声が増し、清国に滞在する貿易商や宣教師からも、それぞれの目的上、日本との交易の必要性を政府に要望していました。

このような中、1845（弘化二）年に政府は下院の議決を経て、清国との望廈条約の批准書交換に向かうアレクサンダー・エヴェレット公使に日本との通商条約交渉の全権を託しました。同時に、ビッドルにエヴェレットの支援と万一の時の使命の遂行を命じています。これを受けたビッドルの艦隊はニューアークを出港しましたが、エヴェレットは病気のため途中で下艦しました。ビッドルは予定通りマカオに入港し、清国との批准書交換を済ませ日本に向かいます。

■クエーカー教徒の子に生まれたビッドル

ビッドルはペンシルヴァニア州のフィラデルフィアで、敬虔なクエーカー教徒の子に生まれ、ペンシルヴァニア大学を卒業しました。この地は1682（天和二）年にウィリアム・ペンがクエーカー教徒のために建設した植民地で、ビッドルが生まれた1783（天明三）年は入植が始まって百年を経た直後にあたります。そのため、当時を回顧した宗教色が強調された時期であったと思われます。また、フィラデルフィアは独立宣言が採択された所で、彼の少年時代には一時的にアメリカの首都⁽²⁾ がおかれていました。このようなことから、ビッドルは正義感と倫理観が強く、アメリカ人としての高い誇りを持っていたようです。彼はフィラデルフィアが示す「兄弟愛」や「博愛」を具現化するかのようになり、弟と共に海軍に入ったのですが、その弟を熱病のために亡くするという悲しみを味わっています。

知識人でもあった彼は、フィラデルフィア海軍療養施設の院長なども経て、東アジアへ向かうことになりました。このように、海戦に加わるだけでなく、幅広い軍務に携わっていたのですが、六十三歳の時の任務である浦賀での通商条約締結交渉では、外交官としての役割も求められ、その資質を問われることになります。

■初めてのアメリカ使節として来航

ビッドルがコロンバス号とヴィンセンス号の二隻を率いて浦賀沖に姿を現したのは1846（弘化三）年七月二十日（和暦五月二十七日）のことでした。この弘化年間江戸時代の後期にあ